一般社団法人 東京電機大学校友会
千葉県支部だより
第17号
平成26年５月10日

発行人
(一社)東京電機大学校友会
千葉県支部
支部長　松本　宏
〒120-8551 東京都
足立区千住旭町5番
東京電機大学
1号館2階
TEL 03-5284-5140
FAX 03-5284-5187

支部だより第17号発行にあたり

支部長　松本　宏

この度ここに「千葉県支部だより第17号」を発行する運びとなりました。これも偏に関係者各位のご理解、ご協力、そしてご指導の賜物であり、ここに改めて御礼申し上げます。日本経済に目を向けると、大企業の久々に見る「ベースアップ」を始め明るい兆しが見える一方、東日本大震災は三年経過して尚回復は道半ばであり、国を挙げての対応に期待するところであります。

さて、暦を紐解きますと、今年の干支は「午」午年は陽と陰の「境」を表し、今まで続いてきた事が一つの頂きに達し、いよいよ新しいエネルギーが湧き上ってくる年とあります。昨年の学園は「巳年」の「財運」「福運」を呼び込み大きく「飛躍」しました。

今年はそれを「うまく」調整する為の重要な年と言えます。つまり学園は次の１００年に向け、「次のステージに勇気と自信をもちチャレンジする年」をかかげてスタート」しました。千住キャンパスは最先端の技術を駆使して省エネ、省CO_2などで各賞を受賞し、大学のイメージアップに寄与しました。

一方校友会は一般社団法人としてスタート二年目を迎えます。現在全国の会員数二八、七七七人に対し千葉県支部は三、八七〇人です。東京都支部設立に伴い、埼玉県支部に次ぐ大支部です。その意味でもしっかりした支部組織を構築し、学園に対する「応援団」と成るよう、努めてゆく必要があります。そこで、千葉県支部の方針として、一．支部役員の充実　二．支部会員の増加　三．充実した総会の実施　四．一都三県支部連絡協議会の継続・充実　五．拡大見学会（首都圏支部対象）の実施　六．支部独自の支部だよりの継続発行（今年第一七号「Ａ四、八頁」　七．大学サポート募金への協力、としました。特に昨年は一七五〇部の支部だより発行に際し、校友会と協力して「会費切れ」約五〇〇名に会費納入お願い文を同封致しました。今年は工学情報冬号でお願いして居ります。

千葉県支部は会員各位のご意見を基に「支部役員が一致協力」して、全国支部の中でも、最も充実して、活気ある、そして楽しめる支部、と成るよう一層努力して参る所存であります。今後共、会員並びに関係各位のご指導・ご協力を切にお願い申し上げます。終わりに当たり、千葉県支部関係各位のご健勝、ご多幸をご祈念申し上げ、支部だより第17号発行に当たっての挨拶に代えさせて頂きます。

ご挨拶

学校法人東京電機大学　理事長　加藤　康太郎

校友会千葉県支部の皆様におかれましては、松本支部長のもと、日頃から講演会や見学会をとおして、会員相互の親睦と研鑽に努められておりますとともに、本学園の発展にご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

我が東京電機大学は、平成24年4月に東京千住キャンパス第1期工事を完了し、次の１００年に向けスタートしたところでございます。古田学長を委員長とした「将来構想企画委員会」の答申に基づき、現在「全学的改編委員会」等により、現代社会のニーズに合った新しい教育・研究システムの構築の実現に向けて鋭意検討しているところであり、その意味でも本年は「次のステージに勇気と自信をもちチャレンジする年」にしたいと存じます。

さて、東京千住キャンパスは、特に「省エネルギー」・「省CO_2」・「防災対策」などについて最先端の技術が駆使されており、評判は極めて良好であり、昨年6月には「経済産業省資源エネルギー庁長官賞」、9月には「一般社団法人照明学会の「照明デザイン賞」、11月には「一般社団法人日本建設業連合会の「第54回ＢＣＳ賞」、12月には「平成25年度地球温暖化防止活動・環境大臣表彰」を受賞し、さらに本年2月19日には「第5回サステナブル建築賞」の中で最高位の「国土交通大臣賞」を受賞するなど、高い評価をいただいているところであります。

また昨年11月22日付、日経ＢＰコンサルティングによる「大学ブランド・イメージ調査」の調査結果によりますと、本学は首都圏の主要大学１２０校中、前年より9つ順位を上げて、「トップ20位」にランクされました。さらに、「キャンパスのデジタル化が進んでいる大学」としては、慶應義塾大学と我が東京電機大学が堂々の第1位となっており、これもまた喜ばしいことでございます。是非お知り合いの方々にもお誘いいただき、本学の東京千住キャンパスへお越しいただきたく、よろしくお願いいたします。

おかげさまで入試、そして就職についても健闘しております。

本学は現在のこの状況を弾みにして、さらなる飛躍を目指して参る所存でございますので、卒業生の変わらぬ御支援をお願いする次第であります。

「東京千住キャンパス創設事業募金」並びに「東日本大震災学生・生徒修学支援募金」につきましては、千葉県支部の皆様をはじめ、多くの方々からご厚志を頂戴いたしました。おかげさまで、当初目標の15億円に達することができました。現在、「学校法人東京電機大学サポート募金」という恒常的にご寄付をお受けする体制も整ってございます。今後とも引き続きご協力のほど、お願い申し上げます。

本学園のさらなる発展のためには、卒業生と母校の連携は不可欠であります。千葉県支部の皆様には、引き続きより一層のご支援、ご協力を賜りますよう、改めてお願いする次第であります。

最後に、千葉県支部の益々のご発展と会員皆様のご活躍並びにご健勝を心より祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

ご挨拶

一般社団法人 東京電機大学校友会 理事長　渡辺　貞綱

千葉県支部の皆様におかれましては、日頃より校友会活動にご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。特に千葉県支部は松本支部長のもと、会員相互の親睦と研鑽に励まれておられることにあらためて敬意を表します。

東日本大震災からすでに3年が経ちました。今年も3月の大地震発生時刻には全国で黙祷が捧げられましたが、復興活動もままならないなか、未だに27万人近い避難者がおられることの重大さに改めて身につまされる思いがいたしております。千葉県内でも未だ被災の爪あとは残っているのではないかと拝察され、心からお見舞いを申し上げます。

日本の産業界は昨年からのアベノミクスの影響もあり、長期間にわたり低迷していた経済もようやく回復感をもたらしておりますが、

雇用や所得の増加による消費の拡大といった本格的な景気の好循環が回りだすには、なお時間がかかると言われております。

また、ロシアとEU諸国・米とのクリミア半島での民族問題に絡んだ主権争いは我が国の尖閣諸島、竹島問題よりもきな臭さを感じられるところでもあり、経済の回復ばかりを喜んでいられない状況にあると思います。

このような状況のなか日本では今まで以上にグローバリゼーションが進むとともに産業分野でもパラダイムチェンジが求められております。

東京電機大学はこのような社会環境の変化に適応し、グローバル人材の育成やイノベーションの創出に力点をおき、次の時代のニーズに応える教育として「東京電機大学グランドデザイン」の構想のもと、中長期計画が立てられ、「ものづくり教育」をより一層重視し、理工系私立大学のトップを目指すことを目標に全学的改編に取り組まれていると伺っております。

卒業生として学園の発展は大変嬉しく、大いに期待するところでもあり、校友会といたしましても、これまでにも増して学生募集の支援活動、在学生および本学社会人コースに学ばれる方々の就職支援活動などに協力し、学園を応援して行く所存です。

校友会は皆様のお力添えもあり、お蔭様で無事に昨年4月より一般社団法人としてスタート致しました。皆様のご理解、ご協力にあらためて御礼申し上げます。

一般社団法人になりましても校友会の立ち位置は従前と基本的に変わりませんが、卒業生相互の親睦支援活動やイベントの協賛だけでなく、学園とも緊密に連携しながら、卒業生の皆様の熱い思いを学園にお伝えするとともに、学園の状況を「工学情報」や校友会ホームページなどで皆様にお伝えするなど、今迄にも増して皆様のお役に立つ活動を推進していく所存です。今後とも引き続き校友会に対する皆様方の温かいご支援、ご協力を賜ります様、お願い申し上げます。

また、昨年より寄付者の意思を尊重し使途を指定できる恒久的な募金「東京電機大学サポート募金」のお願いを学園と連携して行ってまいりました。千葉県支部をはじめ多くの会員の皆様から多額のご寄付を戴き、厚く御礼申し上げます。お蔭様で初年度の目標額を達成する見通しです。皆様からの温かいご芳志をたくさん賜りましたことを心より厚く御礼申し上げます。どうか、今後も引き続き宜しくお願い申し上げます。

結びにあたり、千葉県支部の益々の発展と会員皆様のご健勝、ご活躍を心より祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

東京千住キャンパスの各賞授賞について

（学）東京電機大学総務部（企画広報担当）

東京千住キャンパス（100周年記念キャンパス）が開設し、2年が経過しました。学生を主役とした理工系教育の理想を追求したキャンパスは、環境、安全・安心と最先端技術を導入した都市型キャンパスの未来形として、各方面から評価されています。これまでの間、キャンパスが受賞した主な賞をご紹介させていただきます。

第15回電力負荷平準化機器・システム表彰「経済産業省資源エネルギー庁長官賞」

平成25年6月4日、第15回電力負荷平準化機器・システム表彰（一般社団法人ヒートポンプ・蓄熱センター主催）にて本学および関係3社が、「経済産業省資源エネルギー庁長官賞」を受賞しました。

連結式縦型蓄熱槽

電力負荷平準化は安定的で低廉な電力の供給を達成するうえで極めて重要であり、我が国経済の高コスト構造の是正、国際競争力の向上、国民生活の向上に資するだけでなく、省エネルギー、二酸化炭素排出抑制などにも寄与するものです。この表彰制度は、電力負荷平準化の特に優れた取り組みを表彰するものです。

エアフローウインドをはじめとする先端的な負荷削減技術及び高効率機器を採用するとともに、情報・セキュリティシステム等と連携した設備コントロール手法を採り入れ、消費エネルギーを大幅に削減したうえ、世界初となる連結式縦型蓄熱槽等による深夜電力を利用し昼間電力を半減させる電力負荷平準化を実現したことが高く評価されました。

表彰盾授与では、加藤理事長が表彰盾の授与を受け、ヒートポンプ・蓄熱センター理事長で前東京大学総長の小宮山宏先生からの挨拶があり閉式となりました。

○受賞機器・システム名：「東京電機大学東京千住キャンパスにおける連結式縦型蓄熱槽を用いた高効率熱源システム」

○団体名：学校法人東京電機大学・株式会社日建設計・株式会社日建設計総合研究所・東洋熱工業株式会社

第54回BCS賞

BCS賞は、一般社団法人日本建設業連合会による主要な文化事業として、半世紀以上にわたって毎年、国内で建築された優秀な建築作品に授与されています。この賞の特徴は、建築の事業企画、計画・設計、施工、環境はもとより、供用開始後、1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考され、建築主・設計者・施工者の三者を一体で表彰するものです。

東京千住キャンパス外観

11月15日に帝国ホテルで挙行された表彰式には、本学を代表し、古田学長等が出席し、表彰状とブロンズ製表彰パネルが授与されました。表彰パネルは東京千住キャンパス1号館1階に設置されています。

平成25年度地球温暖化防止活動環境大臣表彰

環境省が平成10年度から実施している「地球温暖化防止活動 環境大臣表彰」において、〝東京電機大学東京千住キャンパスにおける省CO_2エコキャンパスの実現〟が対策技術先進導入部門を受賞しました。

受賞部門である「対策技術先進導入部門」とは、ヒートポンプや省エネ建物等、温室効果ガスの排出を低減する技術や製品の大量導入・先導的導入に関する功績を評価するもので、23件の応募に対し、5件が選定されました。

表彰式は12月4日（水）にKKRホテル東京で開催され、本学代表として古田学長が出席し、石原伸晃環境大臣より表彰状及び副賞（記念盾）が授与されました。

この表彰は、地球温暖化対策推進の一環として、地球温暖化防止月間である毎年12月に、地球温暖化防止に顕著な功績のあった個人又は団体に対し、その功績をたたえるため表彰を行うもので、今年度は204件の応募のうち、45件が採択されました。

第5回サステナブル建築賞国土交通大臣賞

東京千住キャンパスの省エネルギー・環境負荷低減に向けた取組みが評価され、第5回サステナブル建築賞国土交通大臣賞（商業施設その他部門）を受賞しました。

この賞は、建築物として優れた作品であるだけでなく、建築主、設計者及び施工者の協力により、省CO_2等に顕著な成果を上げる先導的な建築物を顕彰し、設計、施工及び運用管理技術等の向上と普及、サステナブル社会の構築に寄与することを目的として、一般財団法人 建築環境・省エネルギー機構が行っています。

2月19日（水）霞ヶ関ビル内で開催された表彰式では、本学を代表して古田学長が賞状

の授与を受けました。

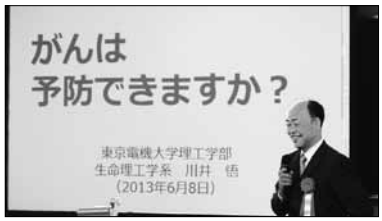
次の100年を目指し、新たな飛躍に向けて進化する東京電機大学では、これからも技術で社会に貢献する人材を育成し、社会からの多様な要請に応えてまいります。

千葉支部　第43回総会と講演会及び懇親会の報告

常任幹事　市川　勝利

日　時　平成25年6月8日（土）
場　所　東京電機大学　千葉ニュータウンキャンパス（教育棟2階207教室）
10時30分　喜多村副支部長の司会で、理工学部生命理工学系　学術博士　川井　悟教授に講演をいただく。

「がんは予防できますか?」をテーマに、がんは、昭和54年より脳血管障害を越えて、増加している。医療技術の進歩で、がん以外の死亡が低減したこと、また、技術の進歩でこれまでがんと診断できなかった病気まで、がんと診断できるようになったためと説明された。原因として、環境汚染、ダイオキシン、生活習慣性ハイリスク、家族性ハイリスク、飲酒、喫煙、等々。部位ごとに区分すると、乳がん、胃がん、肝がん、といった発生部位ごとのメカニズムと、予防法を解説された。



11時58分　質疑応答多数、盛況のうちに終了した。
12時15分 支部総会開催
喜多村副支部長の司会
先ず、渡辺校友会理事長が加藤学園理事長挨拶の代読と併せて、千葉県支部の活発な活動を評価していただいた。

学園は「次の100年に向けて東京電機大学の新たな飛躍をねがって～生き残りから勝ち残りへの転換。そしてさらなる飛躍へ～」の年にしたい。校友会は一般社団法人に移行し、主な変更点は

① 会員は全卒業生　②運営は代議員制
③ 同窓会・支部を含めた連結決算となる。

松本支部長挨拶、主として支部役員の充実と会員の増加、拡大見学会の実施、並びに千葉県独自の支部だよりの継続発行.今年第16号A4、8頁を実施したい。

第四十三回総会　司会　喜多村副支部長
開会の言葉　司会
総会議事
第1号議案　平成24年度事業報告案承認の件　田中副支部長
第2号議案　平成24年度決算案承認の件　鈴木常任幹事
平成24年度監査報告　山本監事
第3号議案　平成25年度事業企画案承認の件　田中副支部長
第4号議案　平成25年度予算書承認の件　鈴木常任幹事
第5号議案　支部役員一部改選案承認の件　松本支部長
第1号議案から第5号議案まで、全員一致で承認。
12時15分　閉会の言葉　司会
（懇親会までに記念撮影、教育棟外階段）
12時30分　教育棟2階学生食堂にて懇親会
司会　鈴木（修）常任幹事
大山　実情情報環境学部次長の挨拶
柳田大学同窓会長の乾杯で開催

来賓：大学の宗前部長、嶋田課長、渡辺理事長、中高・電機の各同窓会長に参加していただき、和気あいあい盛り上がり、15時20分杉沢相談役の関東一本締めで終了。（今回の出席者は、来賓8名、校友会員35名）

千葉県支部ＪＡＬ整備場見学記

副支部長　安藤　志朗

平成26年2月22日午後。我が支部主催の見学会は、東京都支部、神奈川県支部、埼玉県支部の参加者を含めて、申込者は48名。支部はじまって以来の規模である。全員参加してくれるかの不安はあるが、天候は上々。寒い中であるが、集合場所の東京モノレール新整備場駅改札口で支部役員は揃った。今回は、羽田の日本航空整備場、すぐそばはA滑走路。現地集合なので、新整備場駅の改札口で受付。でも、駅員さんには、迷惑だと、お叱りを受ける。

やはり、時間ぎりぎりまで待つが、5名のキャンセルが出て、最終参加者は43名。奇跡的に、予定した人数とドンピシャ。うまく帳尻合わせとなった。15時前入門。セキュリティが厳しいため、スイカみたいなカードを広報スタッフから一人一人受領し、ゲートにかざして屋内に入る。展示室横の会議室へ案内され、本日の見学スケジュールを聞く。部屋の隣は、5つのブースに分かれた説明コーナー。自由見学である。皆さん喜んで挑戦したのは、機長の制服。写真に撮ると本当に機長みたいにカッコいい。客室乗務員コーナー、空港スタッフコーナー、パイロットコーナー、航空整備士コーナー、貨物スタッフコーナーと、急いで見学とスタンプラリーも押印。天皇がお座りになった座席まで展示してあり、歴史としても凄い。メインの説明はボーイング777で案内されている。

離陸時のスピードは自重が340トンもあるのに、300キロ以上無いと駄目との事。1万メートル上空では巡航速度が1000㌔だそうで、それに達するまで、離陸して約25分。だから、シートベルトサインも結構速く消えるのかなと感心して聞く。離陸時は自重が340トンだとの事、着陸時は、その燃料が減った分だけの230トンで降りてくる。そのスピードが250㌔。金食い虫である。何しろ1ℓでたった50mしか走れない。私の車と比べたら、雲泥の差。燃料は、離陸時、ドラム缶900本分を積載しているとの事。普通のガソリンかなと思っていたら、それより少し粗悪なケロシンだそうだ。凄い実例を紹介された。このジェットエンジンの後ろにバスを置いていたら、そのバスがエンジン噴射により飛ばされたそうだ。では空気吸い込み口のエンジン前部では?そのバスが吸い込まれるそうだ。其れでは、カモメなどの鳥がエンジンに入るのは簡単だね。バードストライクになると、エンジンがダメになり、運航中止だそうで、毎日ガス砲で、ドカンドカンとやっているのだけど、鳥も慣れてしまい、逃げてくれない。そのため、猟友会の出番もあるとの事だった。定時運行とは大変な事なのだな。ちなみに、表示してある、フライト時刻は、ボーデングブリッジを離れる時間だそうで、離陸する時間ではないそうだ。だから毎回遅れるのだね。でも、着陸は、概ね予定時間には、着くので、巡航時に時間稼ぎをやっているのかな?

会議室での事前説明とビデオが終了したら、さすがＪＡＬ、隣に買い物ブースが有ります。ぜひともお買い上げ下さいと来た。参加者はそれぞれに、バスタオルやスチュワーデスの制服などを買い求めていた。でも、良い値段ですね。サッカー日本代表のTシャツは良い物のため良く売れていたけど、私は買わなかった。

さて今度はメインの整備場見学。目の前に777が足場を組まれて囲われている。昔支

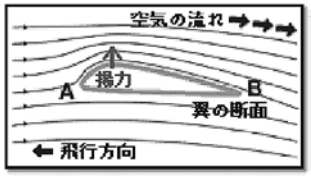
部で、成田で見た整備風景とは全く違う。外からしか見られないようだ。客室の備品類を取り外して、点検整備しているコーナー、トイレを修理しているコーナーなど、部品単位で整備している。もちろん整備する期間は決められていて、それに応じて点検整備が決まってくる。私たちが見学した時は、二機のジェット機が入庫していた。外からだけだったので、良くわからなかったな、と感じた。この点は成田での見学の方がリアルだったな。でも、圧巻はその後。整備場は、A滑走路の目の前、着陸するジェット機が数分間隔で目の前を通過する。凄い。タイヤが地面とタッチする衝撃で煙が上がる。それが目の前で自分の目で見られるのである。劇場にいる気分である。これは、絶対に見られない光景である。参加された校友会員だけしか見られない劇的なショーであった。

羽田空港JAL整備場　校友会千葉県支部見学会　平成26年2月22日

記念撮影を格納庫内で撮り、JALの見学会は終了した。其のあと、隣のビルの一階にある、「稲穂」で懇親会を開催し、皆様のまたやれと言う励ましに、次回は何処にしようかと言う贅沢な悩みを抱える事となってしまった。参加者の皆様、千葉県支部の見学会へご参加有難うございました。次回もお待ちしております。全員が無事に羽田空港を後にしたのは19時半を廻ったころだった。役員の皆様お疲れ様でした。そして次回もお願いします。

なぜ300トンもの飛行機が飛べるの？

左の図面を見てください、翼の断面を見ると、上にふくらんでいて、下が平らになっていますね。矢印の後ろ方向に空気の流れが生じますと、流れは翼の先（A点）で翼の上と下に別れ、翼の終わり（B点）でまた一緒になろうとしますね。このとき、翼の上側のほうが下側より距離が長いため、上を通る空気のほうが下を通る空気より速く流れ、上側の気圧のほうが低くなりますね。そのため、ものを持ち上げる力（揚力）が生じて、あんなにどでかい飛行機でも、大空へと舞い上がることが出来ます。学園で習ったことが思い出されますね。やはり勉強していると、ためになるものです。



安藤志朗記

五〇周年に向け改革を

喜多村　賢一郎

校友会（本部）が発足して一〇四年を経た現在、千葉県支部が四四年を迎えることは、早くから設立に奔走された諸先輩の皆様の並々ならぬ努力の賜物であり心より敬意を表したいと思います。

この度、永年お世話になった支部の役職を辞めることになり、支部だより編集部より何か想い出などをとの話が有り、文才の無い小生ですが当時を振り返りながら記憶をたどってみました。

初代の並木昭支部長時代に、既に会員であった電機学校卒の弊社元社長杉本良祐氏の手伝いでこの会に関わった事が始まりで、のち杉本氏の後を受け昭和五五年（一九八〇）頃入会したものと思います。以来今年で三三年になります。

その間、並木昭氏を始め歴代支部長や役員の皆様に大変お世話になり感謝申し上げる次第です。取り分け関泰雄支部長時代には、支部会則の整備、千葉、神奈川、埼玉の各県支部による三県会議の提唱、支部だよりの発刊等々、現在の支部の骨格が整ったものと思います。

そして、現在の松本宏支部長に引継がれてからは、同級生でもあり学園の理事長でもある加藤康太郎氏との名コンビにより大きな前進を果し、全国有数の支部に発展致しました。

しかしながら、千葉県支部の草創期は会員も五〇名（この頃支部設立は一〇〇名以上としていた）足らずの時期も有った様で、地区別制や一部ブロックを加えるなど会勢拡大の為の努力が資料より読み取れます。総会々場も千葉市内を中心に、一時期市川市内もありましたが、平成一二年から学園のご厚意により学校施設を使わせて頂きました。

近年ＩＴ化が進み社会環境も大きく変遷している中で、若い会員の皆様による時代に即した改革が期待されております。

さて、小生「だより」への投稿は初めての為自己紹介を少し、日経新聞の「私の履歴書」を真似てみました。

太平洋戦争開戦の年昭和一六年（一九四一）福岡県朝倉郡に生まれました。当時子供ながらにもB29爆撃機の編隊を見た記憶が残っています。昭和二五年（一九五〇）小学校三年の時、明日が運動会という前日九月二〇日、故郷を後に蒸気機関車の特急列車に乗って長時間掛けて博多駅から東京駅迄来ました。関門トンネル（関門海峡）が近づくと、車掌さんが窓を閉めるよう車内を廻ります。今では考えられない光景です。

最初は千葉県東金町に移り、半年後千葉郡内へ、そして昭和二九年父の会社が有った現在の千葉市へと移り住み計三回引越しました。その為子供の頃大事にしていた一生持っていたい様な貴重品も全て失いました。

昭和三五年電大高校を卒業し、家業の電気工事業を手伝うことになりました。しかし、元々家業は嫌いでサラリーマンになって全国を歩き廻りたいと思っていました。止む無く家業に就きましたが、在学中芸能界に憧れ母親に大反対を受けたこともありました。二三歳の時父親を亡くし家業継承が決定的となりました。

その頃は、戦後復興から続く高度経済成長期にあり建設業界も好況期で、我々業界も多忙な時期を過しました。昭和三〇年頃から四〇年頃にかけ、関係機関の要望もあり、首都圏では側面からの支援の為地方組織として各種業界団体が発足した時期でした。自分自身も家業の傍ら約三〇年間業界活動に従事してまいりました。

斯して、平成二一年七月それ迄お世話になった大勢の皆様に感謝し、小生の五〇年に亘る電気工事業に終止符をうつ事になりました。折しもこの年、結婚四〇周年にも当り併せて記念旅行を楽しんでまいりました。

もう五年目になりますが、大病も致し健康で有る事の意義をかみ締め、若い頃から旅行が好きでしたので元気な内にと夫婦であちこち楽しんでいます。現在は自分史を残そうと思い資料を集めているところで仕上りが楽し

みです。

これから千葉県支部も近い将来五〇周年を迎えます。近く一都三県による支部交流も計画されている様ですし、益々本県支部の役割が重要視されてまいるでしょうし大いに期待しております。

ありがとうございました。

平和ボケから脱しよう

鈴木　修一

近頃よく安全と安心が保証された社会と言う表現が使われるが、こうした感覚がまかり通る事が平和ボケの原拠と思う。一つの集団があって、民主主義の原則に沿って安心感が抱ければ、そこは安全な世界と考えるべきである。しかしそうした中に居て安心を感じられない人は労力や費用を負担して安心の場を作るなり、その場を離れるなりするしかない。安心というのは個人の感覚であって、そこまで行政等の組織によって完全に保証されるものではない。だから、自治しているものに対して安全の保証は要求しても、安心を保証しろと言うのは見当違いである。

また安全は過去からの経験値に委ねられる部分が多くを占め、未来に対する要素は予測の範疇となる。従って、人間が生きていく上において絶えず安全などと言うことは無く、油断なくとか、緊張感を持って己をたしなめてゆく必要があって、絶えず気を引き締めて生活をしていくべきである。そもそも、時間が経つのが早いと言う人が沢山いるが、緊張感を保って生活していればそうそう早くは過ぎ去らない。人生を振り返った時に、強く心に残っているのは快楽に耽った時ではなく、窮地に対処した時の方が遥かに多い。

人間の祖先と言われている猿は、敵に出くわすと木に逃げる。動物の中で猿と人間だけが掌と指の握力で木に登ることができて、緊張すると、登る時に滑らないように掌に汗が出てくる。

皆さんも、もうお解りと思うが、我々生活している中で手に汗握ると言う言葉があるように、猿からこうした本能を受け継いでいて、中には油手と言って僅かの興奮でも汗をにじませる人もいる。高齢者の中には、かって力仕事をする時に、気合と共に掌に唾をかけて作業をした経験者もいると思うが、人間は緊張感を持って事に臨もうとする本能が備わっていて、そう言う感覚に馴染めない或いは億劫に感じる人は、病人を除いてやはり平和ボケなのであろう。

ここからは事例に触れるが、最近川崎市の警察で失態をやらかした。取り調べ中の凶悪犯人がその隙を見て所内から逃走した。話は飛ぶが今から四・五十年前であろうか、警察の最高幹部が民主警察と称して、警察官が民衆に対していわゆるオイ、コラと言った高圧的な言葉遣いをやめさせた。一事が万事で、こうした庶民と対等の立場になってしまえば、事が発生した時に警察官が前面に立とうとする気概や責任感を希薄にさせるに違いない。犯人が逃げたら誰にも先んじてそれを追いかけなければならないはずの警察官が、メタボ調の体躯であっては、むざむざと捕り逃がしてしまう。それでもそうした身形を改めさせようとしない警察組織には平和ボケの嫌いがある。しかも本件についてはまる二日間に及ぶ人騒がせをしておきながら警察当局から何の陳謝もないし、経過報告はおろか、形骸化したとは言え再発防止策なる言葉さえ聞こえず、益々助長していくのではないかと危惧される。

我々子供の頃に、外で悪さをしたら身近にいた大人から大声で叱咤され、お巡りさんを呼ぶぞと脅かされた。このように警察官に威厳があれば、姿があるだけで抑止力が働くばかりか、民衆もまた、行儀をわきまえない者達を見過ごしづらくなる。

東日本大震災は沢山の被害者を出したが、あの時一人の犠牲者も出さなかった村落が幾つかあった。どこも共通していたのは毎年自治体指導で高台や里山へと逃げる避難訓練をし、同時にその通路の保全を図っていたと聞く。こう言う結果をみると、犠牲者を出した多くの市町村は、平和ボケしていたと言わざるを得ない。そもそも想定外と言う言葉が流行ったが、あれはその場しのぎの逃げ口上であろう。

昨年フィリッピンのレイテ島を襲撃した台風三十号で津波にも匹敵する高潮に襲われた。気象学者が説くところによれば、温暖化がこうした現象を招いていると称していて、国内においても異常気象との言葉が適当でない程、ここの処毎年豪雨による災害が発生している。レイテ島を襲ったのと同程度の台風が今夏東京湾に襲来する危険性は、津波の発生よりも余程高いように感じる。

そんな時にスーパ堤防の有無をのんびりと小田原評定している所もあるようだけれども、いかに安全な場所に迅速に逃げられるかが問われているのであって、人命尊重は当然であるが、犠牲者をどのような方法で少なくするかの妥協点が必要であって、こういうことも平和ボケから脱しないと決断が出来ないであろう。

昨今豪雨にみまわれて水没する街が出ているが、そこが観光地だと、膝や腰まで水に浸かりながら奔走している住民を顧みることもなく、地元で準備してくれた舟に悠然と乗って帰っていく観光客がいて、本当に情けなくなる。自分で好んで来た道くらい自分の責任で帰れと言いたい。平和ボケを絵に描いたような光景であるが、地元の人達も過剰なサービスなど不要と考えるべきだ。

話は少し前に戻るが、まだ小生が勤務していた頃、社内食堂で食事をしていたら、同じテーブルに二人の若者が席を取り、こんな会話を耳にした。「あいつは、喧嘩した事があるんだって！」と驚きの顔つきで言葉を交していて、小生もまた意外な発言に耳を傾けていた。我々子供の頃には喧嘩など当たり前で、売られた喧嘩は買わねばならぬといった雰囲気さえあった。喧嘩をしなかったら、殴られた時の痛さも知らず、ダメージの限界も分からず、そのやめ方にも迷い、もっと大切な駆け引きのこつも会得できない。これに輪をかけるような教育現場もあったようで、運動会で負けた生徒に劣等感を持たせないために徒競走はしないと決めた学校が有ったと聞く。それを主導した人は勿論、それをそのまま鵜呑みした父兄、そしてそこで感化された不幸な生徒達には、これから論じられようとしている集団的自衛権や憲法九条等に何らの関心も持てないのではないかと心配になる。

今、日本の周りは誠に不穏な状態で、三つの国と島の領有権を争い、近くには崩壊しそうな危険な国まであって、国民は平和ボケなどしている余裕はないはずであるが、こうした危機感をどの位共有しているのだろうか。

政府は今、わが国の領土である孤島に無許可で上陸しようとする他国籍人がいたら、こうした平和ボケの人達が政府の方針にどんな反応を示すのか、頭を痛めているに違いない。ただ世界の常識に照らすなら、自国の領土を侵害されたら断固とした対応をとらなければ、その後多くの国から侮られることは間違いなく、フォークランド紛争の記憶を新たにしたいものである。

ここに印象の深いアメリカ映画の一場面を紹介して終わりにするが、それは、戦争を頭ごなしにしている作家がいたが、経験のためにと、従軍記者になって戦地へと赴かされる。偵察の見込み違いで、この従軍記者も戦闘に巻き込まれ、敵との消耗戦になってしまう。そして最後は敵の一人と向き合うところまで追い込まれ、咄嗟に倒れている兵士の銃を取って、間一髪生き残ることが出来る。この従軍記者は、これでこの戦場からしばし離れることになるが、迎えの飛行機に向かいつつ、次のような言葉を発する「人と人が命をやり

取りするゲームは、何と素晴らしいことか、決して戦争はなくならない」、そして映画はジエンドとなる。世界にはこうした映画があり、また尊重している人達が少くなくないことを忘れてはならない。

「命について」

大石　博

我が家をほぼ毎日のように訪れる猫（野良）がいる。体の大きな雄のとら猫だ。

彼の都合で野良になった訳では無いが、今は正真正銘の野良である。彼の飼い主が、家を手放して引っ越す時に彼を置き去りにしたのだ。

彼の事は野良になる前からよく知っていた。たいてい、彼の家の前で日向ぼっこをしたりしていたので、時々ちょっかいを出して遊んでもらっていたからだ。

飼い主は私も知った人で、引っ越すと聞いた時、よもやとは思ったが、悪い予感は当たるもの、彼は野良にされてしまった。無責任極まりない話である、彼には何の落ち度もないのに。

とはいえ、我が家にはすでに二匹の猫がいて迎え入れることもできなかった。（私の言い訳かも知れない）

彼は毎朝、大体決まった時間にやってくる。そして、我が家の中の物音を察知すると、とても大きな声を上げて近づいて来る。声を掛ければうれしそうに返事もしてくれる。猫の聴覚は非常に優秀らしく、電流の音も聞き分けられるとか。

ところで皆様、彼がそうされてしまったように、人間の都合だけで一つの命を簡単に捨ててしまう事をどう思われますか。本来は動物愛護管理法という法律で罰せられる、犯罪なのです。

命の重さに違いは無いと思います。今、同じこの時間に生きている仲間なのですから。

「カササギの橋」を渡る。――その2
地道なものづくりの技（わざ）が支える

堀岡　佑吉

前号のカササギの橋は、中国における人の心の持ち方による心の中の橋でありました。幾分か弱い橋のように思われますが、外交問題が従来に無くギスギスしている現在においては、揺るがない堅牢な橋であります。多くの貿易はそのルートで行われています。貿易量が大きくなった今、その橋は従前になく堅牢化しつつあります。一時日本製品不買い運動や、日本店舗襲撃事件が起きました。

こうした事件が中国と日本の関係を象徴しているかの報道がなされました。ニュース性を求めるがために過度の誇張も否めません。

例えば前述の両事件が発生した当時、二度ともその場から100キロ圏内の場所に滞在し仕事をしていたのでその時の状況を記したいと思います。勿論その場所への行き来には、その事件場所を通りますが、具体的に危険を感じるような場面には一度も遭遇しませんでした。仕事の中でもそうした懸念は、全くありませんでした。三回の放送局、新聞社からのインタビューに全く問題ないという報告をしました。これはマスコミさんにとってニュース性がなく、勿論記事にも放送もされませんでした。石をぶつけられたとでも言えば、記事やニュースになるのでしょうが、実態は全く問題が無いばかりか、散歩をしながら電気店を探している時のことです。見つからないので若者に聞いてみました。その時は筆談で「電気店」と書いて聞いてみました。彼らは、その電気の電の文字を見て、私が日本人であることを悟ったのです。中国の慣用文字は、電気の電の雨冠がないのです。すると、若者たちは、iPADを開いて中国語―日本語変換を試み、丁寧に行き方を教えてくれました。さらに近くにいた若者達までが集まって来て、しきりと片言の日本語で話しかけてきました。その対応は極めて友好的でした。そこで理由を考えてみました。街を歩いていると周囲に日本企業の看板を結構目にします。日本語を話せるということは、彼らにとって重要なスキルであり、彼らの給料を大きく左右するものでもあることがわかりました。さて、電気店に入り、この部品が欲しいと英語で言うと、また、グーグル翻訳で日本語の画面の写真を示して、これで良いですかと聞いてくるのです。またしても若者に囲まれ、しばし、日本語会話の教師をさせられました。しかし、中国でのこうしたやり取りは実に楽しいものでした。

このように、新聞やテレビをにぎわす事件が起きているさなかでさえ、中国での人と人の対話は極めて友好的でありました。やはり報道に100％頼ることなく、自分である程度見て歩くことの重要性を感じました。報道内容を過度に信じ込み偏見を持つことの問題を痛感した次第です。さて、こんな話を身近なところで、我が家でもしてみました。慎重派の家内からすればやはり納得が出来る話ではないのです。あれだけ新聞で騒がれテレビで報道されたものがそうそう簡単に払拭されるわけが無いのです。そこで、私ばかりの渡航ではなく、家内も同行することを検討しました。

受け入れ側も理解してくれてちょっとした観光旅行にアレンジしてくれたのです。普段、仕事オンリーでの渡航にはない歴史や文化にふれる時空が広がりました。歴史的な建造物や庭園、博物館を見れば、直ぐに遣唐使の昔に思いを馳せることが出来ました。技術バカで日本の文化や歴史に深く思いを寄せることが無かった自分を大いに反省したものです。また、日本の歴史教育や、地理の学習でも、もっと興味深い学習の仕方が出来たのではないかと疑問を感じました。年号を覚えるだけの歴史や、場所を暗記する地理ではなく、その時代背景や考え方に及べばもっと歴史を好きになったであろうことが反省させられました。ちなみに小説ではありますが、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」などは五回も読んでしまったものです。このような歴史書であれば、「勉強ばかりしていないで、寝なさい」と言われる位に歴史や地理が楽しかったに違いありません。話を戻し、一緒の旅した家内は、すっかり中国通になり、料理も当初は油っこくて食べるものが無いのではないか？と心配していましたが、さすが料理の王様である本場の中国料理には、すっかり魅せられ、認識が一変しました。古い文化を大事にしている場所も多々あり、感銘を受けました。写真は、上海の近くにある川の大逆流の見学地の建物と公園です。

ニュース性ということで例えば、日本のサリン事件をもとに日本はこんなに危険なところだと報道されたとすれば、それはほんの一部の例外の中の例外を誇張したものになります。十三億人もいる中国、発展を遂げる中国をフィルター無しで見聞して頂きたいものです。日本の十倍以上の人口の中国、優秀で信頼できる人材も多いのです。中国の総人口の一割がそのような優秀で思慮深い人で有った場合、日本の総人口と同じだけのそうした人材がいると考えた場合、よくよく誤解の無いようにしたいものです。

さて、「日本製」というブランド、製品の品質、信頼性が高く評価されてきましたが、その裏に日本人がかたくなに守ってきた「技（わざ）」がこのブランドを支えていることを中国、韓国、台湾でのものづくりを目にして改めてこの無形の「技」に気づ

きました。一見して目に見えない「技」は価格競争において極めて不利であります。どうしても評価されにくい「技」。しかし、しばらく使ってみてもらえば違いが分かるものです。しかし、時間をかけた評価がなかなか出来ない当世の忙しい社会で「技」にこだわる矛盾を感じざるをえませんが、しかし、着実に「日本ブランド」はここ三年ほどの間に定着して来ている事が解かります。価格が「高い」と言われながらももっともっと「技」をブランド化して作り続ける必要を感じます。良いものを手入しながら長く使うことは、結果的の大きなエコであり、信頼であり、経済的にも割が合うということ繋がります。

三週間ほど前、二年ぶりに台湾に行き、車社会の変化に驚きました。二年前は、高級車はビーエムかベンツでした。そして韓国製もたくさん走っていましたが、今は日本車が独占的でした。たった二年での大きな変化に驚きました。ここでも、日本品質が認められてのことと痛感しました。さて、韓国、中国、台湾で工場建設した経験からこの「技」を顧みると、特に中国では、敷地を大きく取り、広大な面積でものづくりができるので、日本と違い、取り回しや導線の引き方が大変に容易であり、大いに感動しました。また、作業人数についてもあまり日本のように気にしなくて良い点、日本では考えられないことでした。このような日本の常識ではできない工場建設がやれることに驚きます。しかしながら、韓国でも中国でも材料や施工については、なかなか日本でのようにはいきません。標準的材料がない場合や、それがあっても施工が標準的に行えないなどの問題があります。日本で常識化している施工ができないのです。そのまま進めてしまうと出来上がる製品品質に大きな問題を長期にわたって起こすため、留意が必要です。施工管理をしっかりやらないと完成時に大きな問題を残します。

もう一度「日本品質」を見直し、世界貿易に負けないものを造り続けたいものです。

カササギの橋を渡って今日も大量の製品が行き来する中で、これまでは価格で負けて来た貿易赤字を「日本というブランド力」と信頼性で早くイーブンからプラスに戻ししたいものです。

東日本大震災3周年を迎えて

鈴木　正仁

大震災の翌年から居住地区で防災ボランティア活動をして1年半ほど経過しました。

２００４年6月頃から継続している「地域防災情報連絡会議」の一環で船橋市高根台地区「防災勉強会」に毎月第二火曜日の夜に出席し一から学び始めております。ここでは司会者のN防災部長が司会兼講師となり船橋市からの最新情報を伝達頂くと共に、「船橋市・避難所運営マニュアル（平成25年4月・市長公室危機管理課作成）」の読み合せを一語一語丁寧に行い、場面が現実となった場合にどう行動するか出席者で討論雑談をしております。このマニュアルは理想の姿は描いてありますが、どのように誰が実施すべきだと明確ではなく個々人が知恵を絞り考える必要のある点です。

自宅が予想外の被害を被った場合に、まず「自助」の原則で我が家の安全安心を確保し次に近所の方々の支援「互助」に向かうことになります。「公助」として市職員の応援は貰えますが迅速かつ的確になされるかどうかは混乱の最中では困難と推測します。

今回の原稿に流用したく今までの会議出席メモを読み返しました。避難シュミレーションの一部として避難所である学校とのコミュニケーションを常日頃交わし開放教室は提供されるのか、学校の体育館にブルーシートを敷いてどのように避難者を各地区毎に割り振りするのか、避難者の受入れの受付設置とやり方をどうするか、女性の意見を反映して安心安全な環境を維持するためにどうするか等です。

避難所運営として「避難所運営ゲーム」（HUGと呼びます）に参加し市の収容基準により判断して避難する皆さんを振り分けます。これは常日頃の市からの最新指針を受けて理解しておく必要があります。避難する皆さんは誰もが受入れして欲しいとなだれ込んで来るでしょう、避難所の収容人員が約6百人、地区の住人は約1万2千人てす現実的に考えて収容は出来ないのは明白です。最初に記述した「自助」が重要であり、自分でどうすべきか常日頃考えておくことが必要になります。

地域防災リーダー養成講座への出席は、小生にとっては初めての経験でした。災害イメージを想定出来ても、本当の恐ろしい体験は擬似体験しかありません、ですから日頃の生活で何かが起きればどんな場面であれ大声を出しての安否確認、救援依頼、火の用心が第一番目のアクションになります。

被害の把握は誰がどのようにするか、地区の会長さん等ですかね、これを地区で集計し本部の市防災管理課に連絡します、このパイプが出来ると救急車、援助物質供給などの援助が可能となります。

要介護者の避難ですが、地区の誰が要介護者なのか把握が難しいと考えます。

要介護者の登録が正しくなされているのか誰が確認するのでしょうか、民生委員でしょうか。

昨年マンション独自で65歳以上で援護を希望するかアンケートを採りました皆さん大丈夫の回答が多数でした。しかし老化は日々進行して行きます、実際に震災が発生した時に改めて援護してと申し出があるのではと推察されます。お年寄りの話は他人事ではなく我身です。

船橋市の有名なボランティア講師Kさんは次の心構えを伝授してくれました。自分を守るのが第一、一部屋は綺麗にしておき防災生活が楽に出来るようにする。地域との連絡を取り合い安全確認をする。安全確認が出来たら公民館や避難所に出向き手伝いを行う。日常でも薬七日分、貴重品、懐中電灯は必ず携帯すること等でした。その通りと思います。

原点に戻り、常日頃何をなすべきか、備蓄品の確保（水、米、乾パンなど）非常持ち出し品の確保（薬、懐中電灯など）簡易トイレの準備及び消臭剤としての猫砂の調達は必須になります。

以上を参考にされ、近未来に想定される地震、火災、液状化、津波などにどのように対処するかをご自分、ご家族、地域で話し合い願えれば幸いです。

尚、防災勉強会の内容は簡単な打合せ録を作りマンション理事会メンバーに回覧して情報提供・共有を心がけております。

小生以上に詳しい方々は多数居られると思います。どのような事でもご教示頂けましたら幸いです。

続・ヒマラヤ北面へのトレッキング

錦稜会　田中　豊明

晴天の日射を受けて出来る上昇気流が、アネハツルのヒマラヤ越えを可能にしているとの事だった。冬を温かいインドの湿原で過ごしたアネハツルが、春にモンゴルの草原で産卵し、夏に子育てをして、秋にインドに向かうと言う。春秋二度も上昇気流に乗って７０００mの上空を飛んで居るのである。

チベットと国境を接するヒマラヤ北面のこの地域は、アネハツルの渡りのコースなのだ。このような話をサーダー（案内人頭）から聞くと、午後の強風も鶴の為に我慢しなければ、と風に向かって歩いた。

厳しい自然現象を利用して、渡りを年中行事にして居る鶴とは別に、静寂に包まれたこの辺境の地でも、かつて戦争があった。１９６０年頃チベット動乱で故郷を追われたチベット人が中国軍を相手にゲリラ戦を展開して居た。チベット人難民は大勢ヒマラヤ越え

をしてネパールに逃げ込んだのだ。

荒涼とした山岳砂漠のこの「鳥葬の国」ジャルコット村に二泊した後、秘境ムスタン王国の入り口、カクベニ村からカリガンダキ川沿いに南下して行った。

数日前通った道をジョムソン経由でマルファの街まで歩いた。この付近は支流に車が渡れる橋がないので、バイクにひとりを乗せたタクシーが活躍して居た。ジョムソン～ムクチナート間1000ルピー（1700円位）程だ。

カリガンダキ川の広い川原にある炭団のような形の黒い石にはアンモナイトの化石が入って居るとの事。気を付けて見たが、「俄か採集家」には見つける事は出来なかった。帰国前にカトマンズの土産物屋で買って来た。一個100ルピー程だった。

マルファの街には「河口慧海」の住居跡が記念館になって居たが、夕暮れ時だったので通過して街はずれのロッジに宿泊した。

交易の街道を騾馬の隊商とすれ違い、また追い越されながらカリガンダキ川沿いに歩いき、ラルジュン村に着いた。

今回の旅のもうひとつ目的であるアンナプルナ8091mの展望台であるツロブギン峠4300mに向った。対岸の尾根を廻り込んだ集落のはずれでキャンプをした。

交易街道から外れた地域の子供達は外国人を見るのは初めてなのだろう。遠くからだんだんと我々の近くに寄って来た。4、5歳の3人と友達になってダウラギリをバックに写真を撮った。

翌日、集落を抜けるとき、学校が休みの日なのか3歳から10歳位の子供が、10人位我々について来た。集落を抜けたところに学校が在り、そこに居た5人程も加わった大部隊が何やら喚きながらの賑やかな行進が暫く続いた。

この道は64年前の1950年にアンナプルナを初登頂したフランス隊が通った道だが、まさか我々をアンナプルナ登山隊だと思って居るのでは無いだろうが。山道にさしかかる所で大きな子に帰るように言い聞かせた。

沢を渡り対岸の斜面を登り始めた。尾根に出るまでの約1000mの登りだが、急斜面の随所に土砂崩れがあり、道が無くなって居るので苦労した。尾根に出て暫くしてカルカ（夏の放牧地）に着いた。今夜のキャンプ地だ。

太陽が山影に入り寒くなってきた。何時もはポーターが先に来てテントを張り私物用バッグを入れて置き、お茶で迎えてくれるのに、今日は何処でポーターを追い越して来たのか我々が先着した。陽が落ち寒くなったが私物用バッグが到着していない上、炊事の支度も出来ない。サーダー、スタッフと薪集めをして焚火で暖を取ってポーターを待った。8時頃にようやく食事になった。

気温零下の野外で朝食を済ませ、富士山の頂上位の標高の尾根道を喘ぎながら登った。

左手にダウラギリ峰が、真っ青な空に真っ白な大きな山体を見せてくれる。

早めにツロブギン峠に着くだろうと期待をして居ると前方が騒がしい。ポーターが「お金は要らないから、ここから帰らせてくれ」と言いだしたとの事。峠に回り込む斜面のトラバース道に残雪がびっしり有るので勘弁してくれとの事である。彼らの足元はズック靴やビーチサンダルである。

止むを得ず4000m地点の狭い尾根上でキャンプをして、峠は諦める事となった。

昨日の事と言い、だらし無い事だ。エベレスト街道のシェルパ族のポーターの様に登山の荷運びに慣れて居ないこの地区の彼らでは仕方の無い事なのだろう。

間近に見るアンナプルナの夢は消えたが、夕焼けと朝焼けのダウラギリを堪能する事が出来た。

来た道を戻り、交易の道をカリガンダキ川沿いに南下するトレッキングになった。

次第に谷が狭く深くなって来た頃ガーサ村に着き、ロッジ泊なので休養が出来た。

ここガーサ村は2000mでこの村の東側には8091mのアンナプルナの山塊が在り、西側には8168mのダウラギリが聳えて居るので在る。ヒマラヤ山脈の中に、二つの高峰に挟まれて6000mも切り込まれた谷底にあるのだ。世界一の深い峡谷である。

ガーサ村からさらにカリガンダキ川を南下すると左右の岸壁が押し寄せて来た。岸壁の中腹を抉って造られた道から見える対岸の岩壁がすぐ目の前に迫り川幅がぐっと狭くなったV字谷、否、まさにY字谷である。

この深い峡谷の岩壁に付けられた交易の道をガーサから15km下ってタトパニ村（タトは温かい、パニは水で温泉のこと実際に野天風呂がある、火山では無いヒマラヤで温泉は珍しい）まで来た。その間の吊橋では20～30頭の騾馬の隊商が何隊も来るので20～30分待ちの渋滞が起る状態であった。

タトパニから6時間程歩いてラフガートに着いた。ここは谷が開け、自動車が通れる道になり、交易路の要衝なのか商店も沢山ある町である。予備日の消化と休養のためロッジに連泊をする事にして、のんびりと街を見物して過ごした。翌朝ベニから専用のバスでポカラに帰り、15日間のトレッキングが終った。

今回の旅はヒマラヤ山脈の北側の山岳砂漠に在る聖地ムクチナート3750mからベニ830mまでチベット、インド間の交易路をカリガンダキ川に沿って歩く旅であった。

ヒマラヤ山脈を南北に横切る川は山脈の隆起と川の浸食との鬩ぎ合いの上に成り立つのだと思う。山が隆起し高くなればインド洋からの湿潤な風が高山に多量の降水（高山では雪になる）をもたらし、その水流が谷を深く削るのであろう。

交易道のつり橋

素晴らしいヒマラヤの景観を造りだして居る自然現象の多くを学べた旅であった。

千葉県支部総会と公開講演及び懇親会のご案内

日　時：平成二十六年六月七日（土）
　　十時三十分　受付十時
会　場：東京電機大学
　　千葉ニュータウンキャンパス

◎公開講演会
時　間：十時三十分～十二時
◎第四十四回総会
時　間：十二時十五分～十三時十五分
◎懇親会　二階職員食堂
時　間：十三時三十分～十五時三十分
◎会　費：三、〇〇〇円

＊講演会は公開講演会ですので、一般の方々も含め、どなたでも無料で聴講できます。

演題「安全を守るための最新のネットワークの技術の動向」について解り易く解説して頂きます。

講師：東京電機大学　情報環境学部
　　工学博士　宮保　憲治教授

編集後記

「千葉県支部だより」第一七号を発行する運びとなりました。皆様方のご協力のお陰と感謝をしています。ありがとうございました。

大きな写真を沢山掲載したかったのですが、力作原稿が紙面を飾ったため掲載出来なかった写真も沢山ありました。御免なさい。

次号も増頁が必要な程の投稿をお待ちしています。

副支部長　田中　豊明